



ミュージアムコラム

武庫川女子大学附属総合ミュージアムでは、所蔵する国の登録有形民俗文化財「武庫川女子大学近代衣生活資料」全 9,092 点から季節の主題に沿う資料を選び、一年を通じて学術研究交流館（IR 館）1 階ロビーにて展示をおこなっています。

2026年度 夏季企画

手ぬぐい

2026年6月19日(金)～8月21日(金)

手ぬぐいは、手の汗や水分を拭うための布であり、白地の木綿のさらし生地に型紙を載せ、手捺染（手染め）やオートプリントなどの技法を用いて模様を染めています。ハンカチやタオルとの大きな違いは、両端を縫わずに裁ち切りのままになっている点であり、1 枚のサイズは一尺三尺（縦約 90.0 cm × 横約 33.0cm）で、この縦長の形状は、江戸時代以来の反物から切り売りしていた頃の名残を留めています。

手ぬぐいには本来の用途だけでなく、端を縫い合わせて袋にしたり、平紐を縫い付けて褌にしたり、数枚を組み合わせて縫って浴衣、襦袢や風呂敷にしたり、細かく切り裂いたものを棒状のものに縛り付けてハタキにしたりと、様々な使われ方がなされています。

今回の夏季企画では、手ぬぐいのデザインとその多様な用途にご注目ください。（平）

1. 「サボテン公園」手ぬぐい 昭和後期

黒潮とサボテンが詩とともにプリントされる。サボテン公園とは、昭和 26 年（1951）に宮崎交通創業者の岩切章太郎が、宮崎県南部の日南海岸沿いに創設した植物園で、昭和 12 年（1937）、小弥太郎峠にウチワサボテンを植樹して、「サボテン林」をつくったことが始まりとされる。

日南海岸沿いは、黒潮の影響を受けて暖かく、ヤシ科の亜熱性植物が街路を連れ、1960-70 年代の新婚旅行ブームの時には、南国情緒溢れる観光地として人気を博した。その後、平成 7 年（1995）の「サボテンハーブ園」へのリニューアルを経て、平成 17 年（2005）に閉館した。



2. 「八十助」手ぬぐい

昭和後期

手ぬぐいには「八十助」の名のほか、三ツ大の家紋、花勝見（田字草紋）の替紋などが見られる。

歌舞伎役者・五代目坂東八十助は、十代目坂東三津五郎（1956-2015）の前名であり、昭和37年（1962）9月に八十助、平成13年（2001）に三津五郎を襲名した。おそらくこの手ぬぐいは、三津五郎襲名より以前に配布、あるいは販売されたものであろう。

3. 腰巻

昭和初期～中期



女性が和装の際に、下着として腰から脚にかけて巻き付けた布で、上部の両端に紐をつけ、それで腰部を留めるようになっている。木綿布などの細片された布を縫い合わせて作られているが、汗をかきやすい部分に手ぬぐいを使用している。

手ぬぐいにある「日興証券」は、かつての三菱銀行系の大手証券会社で、1990年代にアメリカ・シティグループ傘下の日興コーディアル証券となり、現在はSMBC日興証券となっている。

4. 浴衣

昭和初期



複数の手ぬぐいを縫い合わせ、浴衣に仕立てている。

京丹波須知の菓子店「山内精光堂」や、「東洋信託銀行」（現、三菱UFJ信託銀行）などの手ぬぐいが目立つが、左右で同種の布の柄が配置されるよう、計算されているのが分かる。「昭和三十六年三月」・「須知区」と記されるものもあり、おおよその制作年代と制作地が推測できる。

次回の展示は、2026年9月頃を予定しています。